

現在（ならびに近い将来）の日本語を書き表すのに適したローマ字表記を考える

齋藤 純 男

内 容

まえおき

I 意味の区別に関わる音の対立からローマ字表記を考える

(1) 短母音と音節頭の子音

(1-1) ローマ字表記に関して異論が出ないと思われるもの

(1-2) 考察を要するもの [案1] 子音の数（ということはローマ字の文字数）は多い、音節構造は単純

(1-2-1) どの母音とも組み合わせる子音に関わる表記

(1-2-2) 母音との組み合わせに一部制限がある子音に関わる表記

(1-3) 考察を要するもの [案2] 音節構造はやや複雑、子音の数（ということはローマ字の文字数）は少ない

(1-3-1) どの母音とも組み合わせる子音に関わる表記

(1-3-2) 母音との組み合わせに一部制限がある子音に関わる表記

(2) 音節末の子音

(2-1) 撥音

(2-2) 促音

(3) 母音

(3-1) 短母音

(3-2) 母音連続ないし二重母音

(3-3) 長母音

(4) 補足

II 現実的な観点からどう考えるか

まえおき

表音文字による表記は、大体の発音を手がかりにして 意味を持つ単位である 語や形態素を示すもの。

(アラビア語ではもともと母音を表記しない。英語の綴りや日本語の歴史的仮名遣いによる表記のように 音声言語が変化してしまって音との対応が直接的でなくなっても表記法として機能を果たせる。これらは表記の基本が発音の記述ではなく語の表示であることを示している。講義でノートを速く取るために子音字だけを書くという英語圏の学生がいたが、それも語が認識できればよいからである。)

したがって、表音文字による表記は、音声そのものを示すことが目的ではないし、音韻を忠実に反映していなくてはならないこともない。

しかし、新たに表音的な文字による表記を作る場合は、文字と音韻が対応していた方が便利。

(音韻的に区別があるのに表記上区別しない、音韻上区別がないのに表記上区別する、というのは使用者にとって大きな負担となる。)

そのためには、意味の区別に関わる音の対立を基盤として考えるのがよい。

- ・このような基準で論理的に考えていけば、だれが考えても類似した結果が得られる。

ただし、音韻解釈は1つではないので、結果にバリエーションがありうる。

以下に示すものは、過去に提案されたことがあるものとかかなりの部分が重なり、特にオリジナルなものでも特異なものでもない。

日本語自体が激しく変わってしまったというわけではないので、現在行われているローマ字表記法と重なる部分も多くある。

現在の日本語では、かつてできなかった子音と母音の組み合わせが現れているため、そのような組み合わせが存在しなかった過去において定められた表記法から出発するのではなく、現在の日本語（共通語）から考える必要がある。

- ・音に基づくのであって、仮名表記のローマ字による置き換えではない。

(仮名表記には仮名の事情があり、現代仮名遣いは徹底して音の対立に基づいたものではないので、仮名表記の置き換えであつたら、わざわざローマ字表記を別に考える必要はない。)

【参考】

	音写 (転写、音に基づいた表記) transcription	字写 (翻字、文字の置き換え) transliteration
とう (塔)	tō	tou
とう (問う)	tou	tou
とお (十)	tō	too

- ・論理で考え通さなければならず、これまでの表記法の慣れからくる感覚で議論してはいけない。
(たとえば、「本お読む」の仮名表記はおかしいと感じるが、それは慣れによるものであって、論理的な根拠なくそれをおかしいと言うのは本質的な議論とはならない。)
- ・五十音図は古い時代の発音に基づいてできたものであるので、現代語の音を考える際にはそれをそのまま基とすることはできない。
- ・現在行われているパソコンの入力システムなどに影響されることなく考える。
エンジニアは便利なものを作るのが仕事で、入力しにくいという声があがれば使いやすい入力方法を開発する。(たとえば、新紙幣や新硬貨は、すでに使用されている機械の機能に合わせて作るものではなく、世の中に より適したものが作られて、その後で機械をそれに対応させる。)

I 意味の区別に関わる音の対立からローマ字表記を考える

(1) 短母音と音節頭の子音

(1-1) ローマ字表記に関して異論が出ないと思われるもの

あ	い	う	え	お
---	---	---	---	---

a i u e o

や	-	ゆ	(イエ)	よ
---	---	---	------	---

ya yu ye yo

[j]

わ	ウィ	-	ウエ	ウオ
---	----	---	----	----

wa wi we wo

[w] に類似した音

(1-2) 考察を要するもの [案1] 子音の数 (ということはローマ字の文字数) は多い、音節構造は単純

(1-2-1) どの母音とも組み合わせる子音に関する表記 (発音可能な組み合わせは全て含む)

さ	スイ	す	せ	そ
しゃ	し	しゅ	シェ	しよ

sa si su se so

śa śi śu śe śo

[s]

[e]

た	テイ	トゥ	て	と
ちゃ	ち	ちゅ	チエ	ちよ
ツア	ツイ	つ	ツエ	ツオ

ta ti tu te to

ća cí cú ce co

ca ci cu ce co

[t]

[te]

[ts]

だ	ディ	ドウ	で	ど
ざ	ズイ	ず づ	ぜ	ぞ
じゃ	じ	じゅ	ジエ	じよ
ぢゃ	ぢ	ぢゅ	ヂエ	ぢよ

da di du de do

za zi zu ze zo

ža ži žu že žo

[d]

[dz] など

[dz] など

(1-2-2) 母音との組み合わせに一部制限がある子音に関わる表記

か		く	け	こ	[k]
きゃ	き	きゅ	(キエ)	きよ	[k]

ka ku ke ko
 ká kí kú ké kó

「き」の子音 [k] が持つ硬口蓋性 (=i を発音するときの口の構えの特徴) を後続の i の影響と見て、次のように「き」を kí ではなく ki とすると、均整の取れた体系となる。(→理由は後述)

ka ki ku ke ko
 ká kú ké kó

が行、ナ行、バ行、パ行、マ行、ラ行に関わるものも同様。

が		ぐ	げ	ご	[g] など
ぎゃ	ぎ	ぎゅ	(ギエ)	ぎよ	[g] など

ga gi gu ge go
 gá gú gé gó

が行鼻音 (音節頭の [ŋ]、いわゆるが行鼻濁音) は、共通語の土台である東京方言では

- ・現れる場所が予測できる上、現在はほぼ消えている。

Cf. <https://www.youtube.com/watch?v=amscTH7z3iM>

- ・[ŋ] と [g] によって意味が区別される語はもともとほぼゼロ。

したがって、意味の区別に関係しないので、特別な表記は不要 (仮名表記でも表記法はない)。

な		ぬ	ね	の	[n]
にゃ	に	にゅ	(ニエ)	によ	[n]

na ni nu ne no
 ná nú né nó

ば		ぶ	べ	ぼ	[b] など
びゃ	び	びゅ	(ビエ)	びよ	[b] など

ba bi bu be bo
 bá bú bé bó

ぱ		ぷ	ぺ	ぽ	[p]
ぴゃ	ひ	ひゅ	(ピエ)	ひよ	[pʰ]

pa pi pu pe po
 pá pú pé pó

ま		む	め	も	[m]
みゃ	み	みゅ	(ミエ)	みよ	[mʰ]

ma mi mu me mo
 má mú mé mó

ら		る	れ	ろ	[r] など
りゃ	り	りゅ	(リエ)	りよ	[rʰ] など

ra ri ru re ro
 rá rú ré ró

- ・ラ行子音は現れる環境によりバリエーションがあるが、基本的には [l] (専門用語で言う側面接近音) ではない。
- ・英語、フランス語、ドイツ語などの r の文字で表記される子音は歴史的に大きな変化を被ったため、それらの言語だけを見ると l のほうが近く感じるかもしれないが、ヨーロッパの言語でもポルトガル語、スペイン語などのものはラ行子音と似た調音法と響きを持ち、言語によってさまざま。
- ・ローマ字表記は発音記号ではないので l を使うことも可能だが、l (いち) と紛らわしいか。

ひゃ	ひ	ひゅ	ヒエ	ひよ	[ç] [h] (「ひ」は [h] も)
は		ふ	へ	ほ	[x] [h]
ファ	フィ			フェ	フォ

ça çu çe ço
 ha hi hu he ho
 fa fi fe fo

- ・「ひ」の子音の硬口蓋性を後続の i の影響と見る。
 - ・「ふ」の子音の唇音性 (= 上下の唇が近づく特徴) を後続の u の影響と見る。
- これにより、均整の取れた体系となる。(→理由は後述)

・以上のような解釈 (音節構造の簡素化を優先する解釈) に基づくと、子音の数 (ローマ字表記で言えば、子音字の数) が増え、新しい文字をいくつも用意しなければならない。

(1-3) 考察を要するもの [案2] 音節構造はやや複雑、子音の数（ということはローマ字の文字数）は少ない

(1-3-1) どの母音とも組み合わせる子音に関わる表記

- ・「しゃ」「きゃ」「みゃ」などの子音 \acute{s} [ɕ], \acute{k} [kʲ], \acute{m} [mʲ] などは「硬口蓋性」を有しているが、それは直後に続く硬口蓋性を持つ子音 y の影響によるものであると解釈し、 $\acute{s} \rightarrow sy$ 、 $\acute{k} \rightarrow ky$ 、 $\acute{m} \rightarrow my$ などとする。
- ・[si] という子音と母音の組み合わせが可能になってきているので、「し」の子音 [ɕ] の硬口蓋性を後続母音 i の影響と解釈して「し」を si としてしまうと、「し」と「スイ」の区別ができなくなるので、「し」の子音は sy とする。「ち」「じ」も同様。

sa	si	su	se	so	サ	スイ	ス	セ	ソ
sya	syi	syu	sye	syo	シャ	シ	シュ	シェ	ショ
ca	ci	cu	ce	co	ツア	ツイ	ツ	ツエ	ツオ
cya	cyi	cyu	cye	cyo	チャ	チ	チュ	チェ	チョ
za	zi	zu	ze	zo	ザ	ズイ	ズ	ゼ	ゾ
zya	zyi	zyu	zye	zyo	ジャ	ジ	ジュ	ジェ	ジョ

(1-3-2) 母音との組み合わせに一部制限がある子音に関わる表記

- ・「き」の子音 [kʲ] に見られる硬口蓋性は、上の解釈と同じく、直後の母音 i の影響と見、「き」は kyi ではなく ki とする。ナ行、バ行、その他の行も同様。
- ・「ファ」などに見られる子音 [ɸ] の唇音性は、同様に直後に続く子音 w の影響と考え、 hw とする。
- ・これにより、「短母音」「 y +短母音」「 w +短母音」の体系と揃って、均整が取れたものとなる。
- ・ y と w はもともとヤ行子音とワ行子音として存在するので、この解釈によって記号が増えることはない。

ka	ki	ku	ke	ko	Cf.	a	i	u	e	o
kya		kyu	kye	kyo		ya		yu	ye	yo
ga	gi	gu	ge	go						
gya		gyu	gye	gyo						

na	ni	nu	ne	no						
nya		nyu	nye	nyo						
ba	bi	bu	be	bo						
bya		byu	bye	byo						
pa	pi	pu	pe	po						
pya		pyu	pye	pyo						
ma	mi	mu	me	mo						
mya		myu	mye	myo						
ra	ri	ru	re	ro						
rya		ryu	rye	ryo						
hya		hyu	hye	hyo	Cf.	ya		yu	ye	yo
ha	hi	hu	he	ho		a	i	u	e	o
hwa	hwi		hwe	hwo		wa	wi		we	wo

・以上の方式だと

「ティーチング」 (< teaching)

「ヒート」 (< heat)

「チーティング」 (< cheating)

「フィート」 (< feet)

なども区別できるだけでなく、

「テユ」 tyu、「デュ」 dyu

などにも既存の文字の組み合わせによって容易に対応できる。

・このように音の区別ができるという点ではヘボン式に近いが、音の構造を表記に反映させた整然としたシステムとなっている。

特に、[案2]の解釈に基づいた方式では、子音の数 (=ローマ字の文字数、文字の種類) が少なく抑えられている上、並びが整然としている。

(2) 音節末の子音

(2-1) 撥音

さ <u>ん</u> ばい	ほ <u>ん</u> も	[m:]
さ <u>ん</u> だい	ほ <u>ん</u> の	[n:]
さ <u>ん</u> にん	ほ <u>ん</u> に	[nʲ:]
さ <u>ん</u> がい	ほ <u>ん</u> が	[ŋ:]
さ <u>ん</u> 。	ほ <u>ん</u> 。	[ŋ:] [n:] (記号は2つしかないが、前の母音により調音位置はさまざま)
さ <u>ん</u> を	ほ <u>ん</u> を	[̃] [̄] などの鼻母音

- それぞれの音の現れる場所によって音価が決定されるので、音の違いは意味の区別に関与せず、音韻的には1つ。

(ここでは「鼻音性」を持つ何らかの音が現れればよい。それが発音しやすいように周りの音に影響されて変わるので、表面的にはさまざまな音が観察される。1つの音が周囲に影響されて姿を変えるのは、同一人物が行く場所によって服装を変えるようなもの。服装が違うだけで別人物とならないのと同様に、これらを別の音として区別する必要はないし、区別することに意味がない。)

- 場所によって音価が決まっているとは言っても、ゆっくり発音した場合などでは後続の音に完全に同化するわけではない。(発音しやすいように変わるわけなので、発音の仕方が変われば音も異なる。)
- これを「n」で表記するとナ行子音の「n」と混同するので、たとえば「ñ」のような文字を導入する。

ほん	hoñ
ほんも	hoñmo
ほんの	hoño
ほんを	hoño

(2-2) 促音

い <u>っ</u> ばい	[pp]
い <u>っ</u> たい	[tt]
よ <u>っ</u> つ	[tts]
い <u>っ</u> ちやく	[tte]
い <u>っ</u> きよく	[kki]
い <u>っ</u> かい	[kk]
い <u>っ</u> さい	[ss]
い <u>っ</u> しやく	[ee]

- さまざまな音で現れるが、どの音が現れるかは後続の子音によって決定されるので、音の違いは意味の区別に関与せず、音韻としては1つ。
- 他の音に使用されていない文字、たとえば「q」を利用して表記して、

いっばい	iqpai
いったい	iqtai
よつつ	yoqcu
いっちやく	iqtyaku
いっきよく	iqkyoku
いっかい	iqkai
いっさい	iqsai
いっしゃく	iqsyaku

のようにする。

(3) 母音

(3-1) 短母音

異論はないと思われる。

a i u e o

(3-2) 母音連続ないし二重母音

異論はないと思われる。(二重母音はその名称に反して1つの母音で、英語や中国語などの言語の話者はそれを2つに分けることはできない。日本語では2つの母音の連続が速い発話では融合して二重母音的に発音されることがあると言える。)

ai ae au oi ui

(3-3) 長母音

母音の長短によって意味の区別があるのだから、音の対立で考えれば、表記上も区別する必要がある。

ハブ	habu
ハーブ	hâbu / hābu / hábu
おばさん	obasañ
おばあさん	obâsañ / obāsañ / obásañ
大場さん	ôbasañ / ôbasañ / óbasañ
許可証	kyokasyô / kyokasyô / kyokasyó
教科書	kyôkasyo / kyôkasyo / kyókasyo

仮名表記で「えい」とされるもの

[母音連続]	(魚の) エイ	ei
	分け入る (わけいる)	wakeiru
[長母音]	英語 (えいご)	êgo / ēgo / égo
	経営 (けいえい)	kêê / kēē / kéeé

日本語の場合、長母音も意識の上では2つの短母音の連続に分けることができるが、母音の連続と長母音は表記上も区別する必要がある。

歯痕 (はあと)	haato
ハート	hâto / hāto / háto
水売り (みずうり)	mizuuri
(米国の) ミズーリ	Mizûri / Mizūri / Mizúri

(4) 補足

- ・ユニコードが確立した現在、補助記号を使った文字（â ā á ñ ć ś など）の使用に困難はない。
- ・語幹の形を揃えた形態論的表記にすると、外来語とそれ以外の語彙で表記方法を変えなければならなくなり、混乱が起こる。

たとえば、タチツテトは古くは子音は全て [t] で、[ta] [ti] [tu] [te] [to] だったため五十音図で同じ行に並んでいる。後に t が i の前で [te]、u の前で [ts] に変化したが、新たに [ti] [tu] という音節が生じている現在、

matanai (待たない) matimasu (待ちます) matu (待つ)

のように語幹を揃える形態論的表記にすると、全体から見た音の区別上 望ましくない。他にも、

kawanai (買わない) kawimasu (買います) kawu (買う)

のようにする必要も出てくるし、「買って」「聞いて」「飲んで」などの「テ形」の問題もある。音形を表記して matanai macu macyimasu maqte などとするのがよい。

形態論的表記を（部分的に）とっている言語もあるが、音韻論的表記も珍しくない。条件はいろいろで性格の違うものも含まれるが、次のようなものがある。

トルコ語「行く」の不定形 gitmek の git- に対して終止形 gider の gid-

英語の impossible, independent, irregular, illegal

ロシア語「飛ぶ」の現在形の let- [t] と leč- [tʃ]

ドイツ語「与える」の現在形の geb- と gib-

ロシア語「ボルガ川」は Volga で g [g]、その形容詞「ボルガ川の」は volzhskij で zh [ʒ]

- ・原語の綴りと外来語（すなわち、日本語）の綴りを混同してはならない。

たとえば、トルコ語で

asansör エレベーター <フランス語 ascenseur

şoför 運転手 <フランス語 chauffeur

ofis 事務所 <フランス語 office

としているように、日本語で外来語は

erebētā <英語 elevator

doraibā <英語 driver

ohwisu <英語 office

ruporutāzyu <フランス語 reportage

のようにする。

II 現実的な観点からどう考えるか

正書法として定める場合とそうでない場合とは異なる。

正書法の場合は、

新しい文字（トルコ語の点なしの *ı*、ポーランド語の *ą*、チェコ語の *š*）

独自の表記法（トルコ語の *ç* [tʃ] と *c* [dʒ]、ハンガリー語の *s* [ʃ] と *sz* [sʒ]）

例外的な表記（日本語の仮名表記における助詞の「は」「へ」「を」）

などが導入されたとしても、すべての出版物がそれに従って書かれ、教育によって徹底できるため、問題は起こらない。

日本語のローマ字表記

正書法にするわけではないし、仮名があれば日本語の読み書きに困ることはない。

では、ローマ字表記は何のために必要か。

- ・外国との交流において、自分の名前や住所などをローマ字表記する必要がある場合がある。
- ・漢字仮名が読めない人が日本に来たときに地名や駅名などを認識できるように表記しておいたほうがお互いに面倒がなく便利。

（文や文章を書くとなると分かち書きの方法が問題となるが、現在の時点ではそれは想定しなくてよい。）

上に提案した表記法は現在の日本語の音の区別に対応でき、音韻解釈のひとつとして妥当なものであるだけでなく、表記の体系としてもきれいに整っている。特に [案2] は新しい記号の導入がほとんどなく、実用的であると考えるが、正書法とするわけではないので、現実問題としてどうか。

- ・新たな表記法を導入したとして、それによる表記の統一を徹底できるか。（全国の駅の看板などを全て現行の表記から新しい表記に変更できるか。たとえば、Fuji → Huzyi）
- ・ローマ字表記は実際の使用としては人名や地名を表記するぐらいであるのに、大きな労力を払って新たな表記法を浸透させるメリットがあるか。
- ・世の中にヘボン式（に準じた表記）が広まっている。現在の日本語の音の区別に対応でき、なおかつ整然とした文字表記の体系を持つ上記の [案2] ようなものを基盤として定めつつ、一般の使用としては一部の文字や文字連続をヘボン式に近い表記に置き換えて行ってもよいとするのが現実的か。